

戦後における新聞小説の実証的分析 —女性作家の作品に焦点を当てて—

里 新菜

本研究では、戦後掲載された新聞小説を対象とし、新聞小説の特徴を女性作家の作品に焦点を置いて実証的に明らかにする。

日本では女性の社会進出の遅れが指摘されているが、メディア分野における女性の参画は特に遅れていると言われている。内閣府男女共同参画局が実施した「メディアにおける女性の参画に関する調査」によれば、メディア業界の就業者における女性の割合は3割程度である。新聞や放送などのメディア分野における女性の参画は、提供される情報の内容的な偏りの防止や性・暴力表現への有効な対策など、メディアが自主的に女性や子どもの人権に配慮した表現を行うように取り組んでいく上で重要な役割を果たすものと期待されている。一方で、戦後における女性の地位向上や高等教育の普及は、文学を女性にとってより身近なものとし、読者として、また創作者としての女性の文学参加をいっそう可能にしたとも言われている。このようななか、発行部数も多い全国紙は数多くの新聞小説作品を生み出し、女性作家による新聞小説作品も増加する傾向にある。

新聞小説に関する従来の研究には、新聞小説の作品について批評するもの、新聞小説とその挿絵の関係について述べたもの、新聞小説の歴史的な変遷を辿るものなどがある。新聞小説に特有の形式や特質、制約に言及し、既存の型を破るような新しい新聞小説を求める新聞小説論も見受けられる。女性作家と新聞小説に関する研究では、女性作家の小説は話題になる作品、成功作が多いと述べ、その要因について考察し、今後さらに多くの女性作家による新聞小説が執筆されると予測するものがある。しかし、従来女性作家の新聞小説についての研究は示唆的ではあるが、客観的な調査を踏まえたものではない。

そこで本研究では、『朝日新聞』、『毎日新聞』、『読売新聞』に掲載された新聞小説657点（調査期間は戦後から2016年7月31日まで）を対象に、数量的な分析を実施し、おもに各紙における相違や男性作家と女性作家の相違という観点から比較考察した。さらに話題となった女性作家の作品についてはその評価についても調査を行った。

その結果、女性作家による新聞小説は戦後に年代が経過するにしたがって全体に占める割合を大きくしていること、男性作家に比べて女性作家の方が芥川賞や直木賞の文学賞受賞経験とのより強い関係が窺えることなどが明らかになった。さらに、従来、女性作家による新聞小説は映像化されて話題になることも多いと指摘されてきたが、本研究においても多くの新聞小説がテレビドラマや映画と関係してきたことが分かった。しかし、男性作家の作品と比べて女性作家の作品の方が特に映像化されることが多いという事実は見られないことも本研究では明らかにした。

(指導教員 原 淳之)